

外科

1. 【掲載論文】

1) 虫垂が嵌頓した男性大腿ヘルニアの1例

松谷英樹, 大石晋, 吉崎孝明, 池永照史郎一期, 舘岡博, 黒滝日出一
臨床外科: 2007: 62(8): 1123-1126.

2) Docetaxel/S-1 による術前化学療法が著効した高度リンパ節転移を伴う胃癌の1切除例

松谷英樹, 川崎仁司, 柴田滋, 宮本慶一, 佐々木睦男, 伊東重豪, 鬼島宏
癌と化学療法 2007: 34(10): 1643-1646.

2. 【学会発表】

1) 骨盤内にのみ病変が認められた悪性黒色腫の1例

第62回日本消化器外科学会定期学術総会 平成18年7月20日(東京都)
大館市立病院外科

松谷英樹, 大石晋, 池永照史郎一期, 吉崎孝明, 舘岡博

症例は78歳, 女性. 平成2年5月, 直腸癌に対して直腸切断術 (well diff. adenocarcinoma) を施行され, 当科で経過観察されていた. 平成18年10月, CA19-9の軽度上昇を認め腹部CTを施行したところ, 左内外腸骨動脈間に径43 X 39 mm大の類円形の腫瘤を認め11月下旬に入院となった. CT検査所見でリンパ節転移あるいは原発性の間葉系腫瘍が疑われ, 組織学的診断の目的も含め開腹術を施行した. 術中所見で左外腸骨動脈の背側に径5 cm大の腫瘤を認め, 腫瘤摘出術を施行した. 摘出標本で腫瘤は径50 X 45 X 40mm, 白色充実性で出血壊死を伴っていた. 病理組織学検査で腫瘍は類円形, 紡錘形でびまん性に増生しており, 褐色の色素を有する細胞の混在を認めた. また免疫組織学検査でS-100蛋白, HMB-45, Melan-Aが陽性で悪性黒色腫と診断した. 術後に皮膚科的, 婦人科的等そしてPET検査で全身検索を施行したが原発巣は同定されなかった. 現在, 患者と相談の上, DAC-Tam療法を施行中である. 骨盤内にのみ病変が認められた悪性黒色腫はまれな症例であり, 文献的考察を加えて報告する.

2) 術前診断し得た回腸悪性リンパ腫による成人腸重積症の一例

第69回日本臨床外科学会総会 平成19年12月1日(横浜)
大館市立病院外科

松谷英樹, 大石 晋, 吉崎孝明, 池永照史郎一期, 三ツ井敏仁, 舘岡 博

成人の腸重積症は比較的稀で器質的疾患が原因であることが多いとされている。今回腸重積症で発症した回腸悪性リンパ腫の一例を経験したので報告する。症例は 79 歳, 男性。20 年前に胃癌に対して幽門側胃切除術, 10 年前に胆石胆嚢炎に対して胆嚢摘出術を施行された。2006 年 12 月下旬腹痛を認め当科受診。腹部単純 X 線検査で鏡面像, 小腸ガス像を認め腸閉塞症の診断で入院。数日間で軽快し本人の希望もあり退院となった。2007 年 1 月初旬再び腹痛を認め当科受診。腹部に膨満を認め腹部単純 X 線検査で鏡面像, 小腸ガス像を認めた。腹部造影 CT 検査で上行結腸内に同心円状の層構造を認め, 注腸造影検査では回腸への造影剤の流れを認めず腸重積症と考えられた。消化管内視鏡検査を試行したところ腸重積は解除されていた。生検では悪性リンパ腫と診断された。以上より成人腸重積症にて発症した悪性リンパ腫の診断で手術を施行した。手術所見は, 肛門側回腸の上行結腸への陥入, 重積が認められた。用手的整復を施行したところ回腸末端から約 4cm の部位に径 5cm 大の腫瘤を触知した。腫瘤周囲の腫大したリンパ節を含めて回盲部切除術を施行した。先進部は回盲部から 4 cm 口側回腸の径 5.5×4.0cm の Type1 病変で, 病理組織検査において diffuse large B-cell lymphoma と診断された。術後は肺炎を併発したが回復し補助化学療法を施行中である。

3) 胃癌切除によりネフローゼ症候群が寛解した一例

第 69 回日本臨床外科学会総会 平成 19 年 11 月 30 日(横浜)

大館市立病院外科

池永照史郎一期, 大石晋, 三ツ井敏仁, 松谷英樹, 吉崎孝明, 舘岡博, 武内俊

ネフローゼ症候群にはしばしば悪性腫瘍が潜んでいることが, すでに知られており, 胃癌とネフローゼ症候群との関係を示唆する報告が散見される。今回我々は, ネフローゼ症候群を呈した進行胃癌に胃切除術を施行し, 非治癒切除でありながらも, 術後ネフローゼ症候群の寛解を認めた一例を経験したので, 文献的考察を踏まえて報告する。症例は 82 歳, 女性。全身倦怠感, 両下肢の浮腫を主訴に当院内科を受診。血液, 尿検査にてネフローゼ症候群疑いの診断にて内科入院となる。消化管精査施行し, 胃内視鏡検査にて, 胃角部に 2 型腫瘍を認め, 生検にて group V であったため, 外科紹介となった。術前に腎生検は行われなかったが, 胃癌に起因したネフローゼ症候群である可能性が考えられた。ステロイド剤, アルブミン製剤の投与を行ったが, 血液・尿検査の改善傾

向は認められなかった。手術は幽門側胃切除(D1+ α)，Billroth-I で再建した。病理組織学的所見では低分化型腺癌で T3，N3，H0，P0，CY1，StageIV，por2，INF γ ，ly2，v1，PM(-)，DM(-)であった。術後 3 日目より，尿中蛋白の減少を認めた。術後 15 日目で退院となったが，下肢の浮腫は消失し，血液・尿検査でも尿蛋白も少量認める程度であった。術後 4 ヶ月を経過するが，血清中蛋白は基準値範囲内を維持している。

4) 過去 3 年間の当院におけるイレウス症例の検討

第 2 回秋田県腹部救急研究会 平成 19 年 6 月 30 日 (秋田市)

大館市立病院外科

池永照史郎一期，大石晋，三ツ井敏仁，松谷英樹，吉崎孝明，舘岡博，武内俊

過去 3 年間の当院におけるイレウス症例を検討し，特徴と問題点を提示する。症例は 283 例 男性 191 例 女性 92 例(平均年齢 71.2 歳)であり，検討の結果大腸癌イレウスが多く認められ，検診への啓蒙が必要と思われた。また術後イレウス症例では，胃癌術後症例が多く認められ，胃癌術後症例は，long tube 挿入を要する割合が多かった。術後イレウス症例において観血的治療を要する場合は，結腸癌手術後の症例の方が多く認められた。

5) 進行乳癌における術前化学療法 of 検討

第 91 回弘前医学会総会 平成 19 年 6 月 9 日 (大館)

大館市立病院外科

吉崎孝明，大石晋，三ツ井敏仁，池永照史郎一期，松谷英樹，舘岡博，武内俊

2002 年 4 月から 2007 年 3 月までの 5 年間に，術前化学療法を行った進行乳癌症例 5 例について検討した。症例の内訳は，T4M0 症例 2 例，および T4M1 症例 3 例である。用いたレジメンはタキソテール・エピルビシン 3 例，タキソール・エピルビシン 1 例，ハーセプチン・タキソテール 1 例である。各レジメンの施行数は 2~3 コースで有害事象は顆粒球減少であった。効果判定は，PR が 3 例，SD が 1 例，PD が 1 例であった。全例に胸筋温存乳房切除術が施行された。生存期間は，術後 4 ヶ月で再発・遠隔転移をきたし死亡した 1 例を除くと，平均 41 ヶ月 (20-53) で，無再発生存は 3 例 (60%) であった。術前化学療法による Down staging は得られなかったが，局所コントロール (腫瘍縮小) により，乳房切除術を施行し得た。化学療法の治療効果判定が予後予測に関連する重要な因子と

考えられた。術前・術後の化学療法を工夫することにより局所進行乳癌でも長期生存が期待できると思われた。